

教ニ一念三千乎」・「疑云。光宅等諸師明三十界五具乎」・
「慈恩改悔ノ文」・「花嚴經 如法花明ニ乗作仏ノ文」・
「爾前秘密明ニ久遠実ニ乎」・「慈恩恐還ニ属累終末ニ随ニ天台
之釈」・「真言一行皈ニ天台ノ文」・「嘉祥皈ニ伏 智者ノ書」等
とあること。

B 曾谷抄に「若黙止過ニ一期之後。弟子等定謬乱出来之基
也。爰以愚身老耄已前欲レ糺ニ調之」と仰せありし聖教聚集
と其糺調整束に関する深甚なる御決意。

C 御遷化記録に所謂「六人香花当番時可レ披見之。自余聖
教非ニ沙汰之限ニ云云」の御遺誠。

D 注法華經の御注記を根幹として、之に枝葉を加へて次第に
集大成せるものと見らるる金綱集の結構。(此項第十回大会
に於て発表)

等に之を窺ふことを得べし。但し注經には、浄土及び禪門の教
籍は殆ど引用せられて居らず、此点諸宗破立の肝要とは称し難
きに似たれども、文句・記・止観・弘決・補注等の出だせる念
・禪対破の要文を御注記あり。更に又、注經御撰集の時は、専
ら真言対破に意を用ひ給へる故か。

右の如く案じれば、河合日辰師が「註法華經の事たるや、吾
祖一代の設化の蘊奥を網羅して残すことなく、一切經の肝要、
能破所破、至れり尽くせり」と述べたる、蓋し、適評と言ふべ
し。

仏教興立史上

仏讖以後の末法と其重要性

木村 日 紀

仏陀予言の末法に「鬪争堅固白法隱没」の「法滅的末法」と「於
閻浮提白法流布」の「法興立の末法」との二種がある。前者は約
の五百年を指し、後者は残る九千五百年を指す。前者の滅亡史的
末法期は世界史上濁悪な社会制度や人間思想の悪傾向となつて表
われ、それに対して各時代の偉人の反撥が発生し、それが幾多の
過程段階を経て凡てが革新され、現代の如き科学文化の興立史的
末法と転じてゐる。小生の仏滅年代は「衆聖点記」の西暦前四八
五年に一致するから、入末期は西暦一〇一四年となる。この時代
から現代に至る世界史には前述の二種の末法期が現われてゐる。
其処で法華經流布の立場からすると、その主体性は末法にある。
して經それ自体は四仏知見が示す如く人類唯一の解脱教であり、
仏覚証を其のままを經典化したものである。久遠本仏を通して顕
われた「常住不変の諸法実相」は「一切世間」の本然の姿を現わし
た縁起の理法で極めて合理性の法である。其が天台大師によつて
法界円融の一念三千の教理と發展し更に其の合理性が明了となつ
た。故に法華經は合理性を中心する現代の科学文化と矛盾しない
のみではなく、其を指導し、其に処を与へる真理である。故に法

華経が示す末法の予言に照して世界史を解剖し、人類の過去の歩みと其発展の過程を顧ることは極めて興味深く、かつ世界の将来と法華経との関係を知る上に極めて意義深いものがある。

処で末法の予言は独り印度にのみ限るものでなく、全世界に關するのではないと予言の価値がない。経には「於閻浮提」とあって、全世界を指してゐる。然し予言された時代には印度に知られなかつた幾多の国が地上にあつたのである。末法に法華経が閻浮提到に流布するとの予言であるから、末法期に世界が一体化する必要がある。又、末法の大導師として予言された日蓮聖人も一方に「日本第一の法華経の行者」と呼ばれたと同時に、他方に「閻浮第一の法華経の行者」と呼ばれてゐる。前者は明治末期に高山樗牛、内村鑑三等の文士、学者、思想家、宗教家等によって確認されたが、後者は未だ国内的にも国外的にも確認されてゐない。世界の一体化を準備したのは東西の接触であつた。その最初は印度とギリシャの接触であつたが、其後数十回色々の面に於てその接触が行われ、十六世紀に日本がポルトガル、オランダを通して欧州を知ると同時に、一八四八年にペリーの強請を入れて日米条約が成立したので、茲に世界の一体化が完了した。横の世界の一体化と同時に縦に西ローマの滅亡から宗教改革に至る一千年は欧州の法滅の末法期であつたが、其処に反撥が起り、ルネッサンスや宗教改革となつて、現代の如き科学文化の世界へと進展した。合理性の法華経と科学は相通じて、世界人類が法華経の教へを受け入れる時代となつた。やがて「閻浮提第一の法華経の行者日蓮」

も世界的に確認されて、一天四海皆娑妙法へ近づきつつあると信ず。

☒ 書 紹 介

文学博士 塩田義遜 著

法華教学史の研究

A5版特製 価一、一〇〇円

(〒一〇〇)

身延山大学布教研究室編

日蓮宗法要式提要

携帯至便上製 価二〇〇円

(〒二〇〇)

申込先 身延山大学出版部

振替(甲府)一、五九六番